哲學研究　第二百四十八號　第二十一卷第十一冊

論理の社會存在論的構造（承前）

田邊元

四

存在の論理的範疇としての類種個の三つの交互的媒介並にその媒介の原理としての絶對普遍の意味は大體今までに述べた如きものであるかと考へられるが、その媒介の論理を絶對媒介の論理と稱するのは、何も私の考案ではなく、既にヘーゲルにある概念を借りたまでである（例へばラッソン版フェノメノロギー二〇三頁參照）。ところで此樣な私の考に對し始終背景にあつて私を導いたのは數學に於ける連續の問題であつた。私は今日の數學の基礎危機に於ける問題の中心は連續の論理にあると思ふ。成程超限數も所謂無限の逆説を含むものとして問題にならぬことはない。併し此方は結局自然數體系の無限統一を認める論理の必然を超限領域にまで擴張することに由り論理的に支配し得るであらう。勿論逆説を逆

說の儘で包容する爲めには、論理は辯證法化せられなければならぬ。併し此事は所謂限界境位に於てのみ起るのであるから、論理の構成は可算的濃度の構造以上に出ることが無い。從つて辯證法的理性の限界指標の內部に於ては、悟性の分析論理が妥當するのである。然るに連續に至つては分析論理の成立する爲めに必要なる所謂還元原則とか選出原理とかいふものを認めることそれ自身を問題たらしめるのであつて、此等を承認すると同時に連續は論理化乃至形式化せられるけれども、實はそれは連續を非連續に化し、種を個に歸することに外ならないのである。直觀主義の異論は斯かる原理原則に對して提起せられたものと解せられる。此等の原則を前提して立證せられるラッセルの序型論とかツェルメロの整序定理とかいふものが間違であるといふよりも、寧ろその前提たる原則が連續と相容れないことを主張するのが此立場の特色であらう。私は其限り直觀主義の根本主張に正當にして容易に否定し難きものあることを信ぜざるを得ない。數學基礎論の綿密なる研究を離れても、今迄に考へた論理的範疇の構造上其理由を多少推定し得ると思ふ。選出原理を前提して、整序定理の成立するやうな整序集合として連續を考へることが出來るとする形式主義の立場は、畢竟私が前に述べた意味に於て個の全體として秩序附けられた類、に相當するものを以て連續と解するのであるといはれるであらう。それは連續を無限次の無限的秩序に歸するものであるからである。從つてそこでは、如何に背後に自己否定的なる辯證法的媒介を豫想するとしても、表面に現はれた

存在は辯證法的限界境位の內部に於て分析論理を許すものとなる。卽ち連續が個の全體的集合として考へられるのである。然るに眞の連續は個の集合として考へることを許さざる個の根源を含むものでなければならぬ。直觀主義が連續を選擇系列の自由生成の媒質と考へる所以である。その媒質は、如何に多くとも既成の個的要素を蓄藏するに止まる所の集合であるのではなくして、啻に既存的秩序に拘束せられないばかりでなく、更に之を否定することが出來るといふ意味で自由なる、選擇系列生成の媒介たるのである。縱、自由に要素を選び出して系列を生成せしめる根源的媒質といふも、若しそれが豫め既存する要素の集合を意味するのであるならば、勿論選出原理の成立する集合に化せられ、形式主義と一に歸する。然らずして直觀主義の形式主義に對立する特色が維持せられる爲めには、その所謂自由生成の媒質なるものは自己否定的なるものを意味しなければならぬであらう。一の選擇系列と相異なる他の系列といふに止まらず、一の系列を否定しその秩序と矛盾する秩序の他の系列をも發生せしめ得る如き媒質にして、始めて具體的意味に於て自由生成の媒質といふことが出來る(Heyting, Mathematische Grund-lagenforschung, S. 20 參照。)。斯くて直觀主義の意味する連續は、自己否定的媒介なるものを核心とするのでなければならない。私の種と名けるものが正にこれに相當することは明かであらう。私は自己否定的質料としての種を外にして直觀主義の連續を解することは出來ぬと思ふ。新直觀主義の唱首たるブラウワー、現象學の立場から之を祖述するベッカー、などの所說は、なほ此

點に於て徹底を缺くことを免れないが、直觀主義の有力なる代表者ハイティングの右の箇所に於ける言說は、私の解釋を支持する。果して然らば斯かる意味に於て連續を考へることは、分析論理を啻に可算的濃度の極限たる限界境位に於て辯證法的に制限するに止まるものでなく、全面的に分析論理の根源的媒介として辯證法の權能を認め、たゞ後者の否定的契機としてのみ分析論理を承認する結果に導く筈である。それが元來分析論理の領域と認められることに由つて模範的嚴密性を示すことの出來た數學の、根柢を危くするものと考へられるのも當然の事でなければならぬ。併し數論(代數)を超える解析數學は實際物理學と密接に聯關し、もと後者の方法として發達したものであるから、斯かる自己否定的二律背反をその領域の全體に亙り隨處に潛ましめるのも必ずしも怪しむに足らない。それは分析論理の合理性を超えて物質の自己否定的非合理性に係はるのだからである。併しそれが爲めに直ちに解析の全體が根柢を失ふものでないことは、物理學に於ける微視的見地の辯證法的性格が巨視的見地の分析論理的性格に何等累しないことからも類推せられるであらう。たゞ分析論理が自己充足的に自立すると考へた從來の抽象的合理主義が制限を受け、それが辯證法的合理性の契機として二律背反の非合理性を其半面に必然的に隨伴するものとしてのみ可能なることの自覺が要求せられるだけである。元來二律背反が有限の領域に於て起るものでなく無限にまで論理の徹底せられる場合に始めて現はれるものなることは明白であらう。それであるから二律背反に達す

る前に分析論理の無限なる妥當領域があるのである。連續の辯證法は有理數の無限なる領域を何等制限するものではない。有理數系列の極限も全然否定せられるといふことは決してないのである。ただ古典集合論の考へたやうな無制限の妥當性が否定せられ、辯證法的二律背反を自覺して其限界內に於ける妥當を主張するに止まらなければならぬだけである。恰も相對性理論に由つて光速度に近き巨大なる速度の運動には、ニウトン力學の妥當が制限せられて單に近似的と認められ、又新量子論の不定性原理に由つて因果律が制限せられ、微視的現象に對するそれの妥當が統計化せられる如きものである。たゞ基礎反省の原理的立場に對しては此樣な制限の自覺は重大なる意味を有する。例へば有理數系列の極限は最早古典集合論に於ける如く單一なる數として決定せられることが出來なくなり、啻に系列の全體を統率するのみならず之を否定して他の矛盾する系列を發生せしめることも出來るやうな根源を象徵するものとして、對立の動的統一たる意味を有せしめられるに至る。この對立の統一といふ點から見て、同じく古典的立場に立つに拘らず、カントルの基本系列よりはデヾキントの切斷の方が一層具體的であると認められるのであつて、一時の傾向に反し今日前者よりも後者の方が、寧ろ一般に解析の基礎に置かれるやうに見えるのも理由無きことではない。併し既に對立的なるものの統一であるならば、我々が個に就いて見た如く、決してそれは固定せられた靜止點であることは出來ぬのであつて、常に全體を代表し全體の動的秩序に從つて不斷に行爲する

所の全的個ともいふべきものでなければならぬ。その媒介が種の自己否定たるのである。切斷は斯かる自己否定を媒介とする全的個の動的統一なることに由つて、始めて直觀主義の考へる連續にも對應する所があるといはれるであらう。併しながら、此場合に所謂動的とは、單に終結する所無き生成過程に止まることは出來ぬ。斯かるものは既にカントルもラッセルも、極限を以て無理數を定義することが却て極限の存在を前提するといふ循環論に鑑みて、際限なく發展する基本系列の生成の全體を以て無理數を定義した場合に、考へて居たのである。デヾキントといへども自己の考案した切斷の、生成的過程に止まることは氣附いて居たであらう。併しヘーゲルの所謂惡無限たる過程を如何にして統一的なる對象とすることが出來るか。その過程の全體とは何を謂ふか。それは如何なる仕方で存在するか。此等の疑問に答へようとすれば、その過程の生成の法則を以て之を內包的に規定し、終結なく發展する要素も潛勢的には存在すると考へる外に途は無い。縱、ブラウワーに於ける如く所謂二分區間 Dualintervalle の挿入的分割 Einschaltungsteilung に由つて漸次に連續の區間を分割し、後の區間は前の區間に含まれるだけで、例へば順序數の系列に於ける如く後の要素が前の要素に由つて一義的に限定せられることがないから、それは自由選擇の區間系列であるといふにしても、その系列の生成は自己否定的といふ意味を表はすものではない。それであるからベッカーもそれが「理想的目標點」を有するものとし、極限或は限界として實數點をこれに配するのであら

う。併しかくすれば、極限を暗々裡に承認することは蔽ひ難いのであつて、所詮はライプニッツ的に内包量を外延量の根源とし、微分を連續の生成原理とするコーヘンの思想以上に出でるものではない。其說き方の相違を離れていへば惡無限の法則を極限に想定する考へ方に於て之と一致するのである。共にアリストテレスの潛勢說に止まるといはなければならない。併し極限とか限界とかいふものが、對立する兩部分を分つと共に繫ぐ媒介でなければならぬことは、アリストテレス自身の認めた所であつて、それは明かに對立の統一でなければならぬのである。外延的延長の分割に終はあることが出來ぬ。連續は如何に分割するも不可分者には達しない。然るにそれに對し不可分の極限を想定するのは、外延的には可分なるものを却て不可分と思惟せしめる自己否定の絕對否定的肯定より外の原理に依ることは出來ぬ。例を引けば、古き物質原子に對する今日の作用量子の特色も、前者の直接否定的(不可分者として)なるに對し、後者の、肯定に於ける否定として否定的媒介を含む點にあるのではないか。質料的自己否定的種がそれの存在を否定せられて、無からの發生に由り行爲する個としての存在に轉換せられる絕對否定の肯定のみ、始めて能く極限を思惟せしめる。斯かる無からの發生が卽ち行爲であつて、それに於て始めてヘーゲルが『存在を否定する限に於てのみ存在する否定的本質』と呼んだ個が存在するのである(ラッソン版フェノメノロギー二一二頁)。個は行爲に於てのみ存在する。極限は行爲としての個である。單なる生成は潛勢の現勢化である限り有からの發生に外な

らない。極限が潜勢に止まる間は單に追跡の目標として往相的に一方向きに見られるだけで、還相的側面を缺く。從つてそれは到底今述べた樣な對立の統一であることは出來ぬ。それが斯かるものとして可能なる爲めには、自己否定の空無的無が絶對否定の肯定的無に轉ずる轉換がそれに於て行はれるのでなければならぬ。卽ち行爲に於て始めて極限の個が成立するのである。所謂百尺竿頭進一歩とは此意味に外なるまい。極限は微分の根源論理に由つて思惟せられるものでなくして、絶對否定の辯證法に由つて始めて思惟せられるのである。根源の論理は唯分析論理を惡無限に流動化したものに過ぎない。而もそれが可能なのは、辯證法の眞無限を豫想して、後者の立場で行爲的に成立する極限を根源と解するに依る。個がそれ自ら對立を含む一の全體として存在する以上、その根源たる種も絶對否定的行爲の立場に於ては、個の無限なる全體として類となり、眞無限の統一として發展の過程を自己に包む。所謂生成の終結する所なき過程はそれに於て起るのである。然るに新直觀主義の連續論はなほ此洞察に達して居らない。古典集合論や、之を再建强化しようとする形式主義の、原子論的立場に對する批判に於て、それが分析論理の制限を暴くのは鋭利ではあるが、積極的建設の方面に於てなほ實は自ら其制限を脱することが出來ないやうに思はれる。ブラウワーがカントの純粹直觀の空間的側面を斥けて時間的側面のみを採用し、時間の二一的直觀を基礎直觀と認めるのも、辯證法の三一的時空世界的なるに比して抽象的なることを免れない。それは直觀の立

場を固執して有限主義に傾き、行爲に於て絶對否定の眞無限的立場が成立することを見ないのである。彼が、正でも僞でもない命題の存在を理由として排中律の妥當を否定するのも、正にして僞なる命題を認める辯證法に比して抽象的なることは否定し難いであらう。

併し私は今、困難にしてなほ完全なる解決に達して居るとはいひ難いやうな、連續の直觀主義的公理化の問題に此以上立入るつもりはない。以上述べたやうな存在の論理的構造と數學の基礎概念との交渉を、主として前者の方から考へて、それの發達に對し後者との交渉が有した指導的意味を明かにし、依つて以て前者を一層精密に規定したいと欲するに過ぎない。類と個との關係も、此方向から一層闡明せられる所がありはしなかつたかと思ふだけである。さて此樣な存在の論理と數學との密接なる聯關は、プラトンの後期辯證法が其無理數論に導かれたものであるといふ今日一般に史家の認める事實に、夙に其先蹤を有する。種の自己否定的構造を以てプラトンの質料に比した私は、更に類と個との、種を媒介とする絶對否定的構造をプラトンの辯證法に於ける無理數の意味に關係せしめ、今日なほ問題とせられるプラトン辯證法の解釋に觸れて置きたいと思ふ。蓋しこれは單に歷史的興味を有するのみならず辯論法の存在論にとつて原理的重要性を有するものだからである。私は既に曾て『古代哲學に於ける質料概念と現代の物理學』なる小論に於て此問題を論究し、他の場合にもこれに觸れたのであるが、今私の考が多少前より變つた以上は、更に新しき立場から考

へ直すことを必要とするのはいふまでもあるまい。さてプラトンのティマイオス篇に於ける場所（空間）にして同時に錯動原因たる質料が、私の意味に於ける自己否定的質料に相當することは前に述べた如くである。これはフィレボス篇に於て超過不足の二と規定せられた質料にも相當すること明かである。ところで質料の自己否定的動搖が斯かる否定の「二」として規定せられることは、當然それが右に述べた有理數系列の切斷を規定する超過不足の兩方向の自己否定的合一を想はしめること、テイラーの說を俟たない。寧ろ氏が採るデヾキントの古典的見地に據る切斷の非辯證法的なるに比して、プラトンの質料は一層よく右に述べたやうな辯證法的見地に適合するのである。たゞ問題は、プラトンに於て此質料を限定して混合的存在たらしめる形相の統一原理、卽ちフィレボス篇に於ける「一」が、果して私の解する如き類個の絕對否定的動的統一に相應するかどうかにある。テイラーは勿論兩方向をもつ有理數系列を質料の「二」に相當すると觀る立場から、切斷そのものを以て「一」と解し、此切斷の定義する無理數が有理數の非連續的系列を連續化すると考へ、斯くして非連續と連續との相卽が非有と有との協同として、プラトンの辯證法的存在論を根據附ける存在の原理であるとするのである。此樣な解釋は縱、歷史的に十分正確でないまでも、根本の原理に於て正當なるものを把握して居ることは一見否定出來ないやうに思はれる。テイラーに比して一層用心深く、從つて一層歷史的に正確なるものと考へられるトェプリッツの、「一」を以て比例の原理となし、近

代數學の無理數論の切斷概念に訴へる代りに、或比例を超過し或はこれに不足する大小不定の「二」を質料と解し、それを一定の比例をなす如くに決定するのが卽ち「一」の形相であるとするのも、根本の趣意に於ては軌を一にするものといはなければならぬ。何故ならば、比例を特に個々の單一なる比でなく系列的に考へるのは、有理比の相等のみならず、無理極限への近迫をも意味するものと解し得られるからである。併しながら切斷はテイラーが古典集合論の立場で考へたやうに靜的に「一」として限定せられるものではない。反對の兩方向に大小の系列を發生する自己否定的質料は、その大小不定の「二」の中間に相當するものとしての「一」を節度とすることに由つて、不動的に決定せられることを許すものでないのである。切斷は不定を決定し、自己否定的動搖を不動化するものであり得ないことは今述べた所である。それは自己否定を媒介として之を絕對否定的に否定卽肯定する轉換媒介の動的統一でなければならなかつた。然るにテイラーの無理數切斷論は斯かる絕對否定を含むものとは考へられない。此事はトエプリッツの如く、比例を以て「一」の形相とする立場に於ては、一層明白に其矛盾を曝露せざるを得ないであらう。何となれば、元來正當には比例は有理比の相等に外ならないのであるが、比は有理數に相當するものであつて無理數に相當するものとは考へられない。無理數とは元來比無き數の謂だからである。若し一定の比を節度形相として不定の「二」なる質料が決定に齎らされるならば、形相は如何にして無理數の辯證法的統一に比せられる

か。これは中期イデヤ論の非辯證法的存在論（縱、これも國家篇の意味に於て辯證法的と呼ばれようとも）に復歸することではないか。フィレボス篇の所謂節度の倫理はアリストテレスの中正の倫理の先蹤たること史家の等しく認める所であるが、若し中正にして形相の現勢を意味するとしたならば、それは明白に非辯證法的でなければならぬ。これは絕對有の原理にして絕對無の原理ではないからである。縱、之を個々の形相から遡つて最後の原理たる第一動者の純粹形相にまで達せしむるも、それは絕對否定を含むものでなく、全體の單なる目的論的調和の原理たるに止まり、依然として直接的なる絕對有の原理たるに變りはないのである。其故トエプリッツも個々の比でなく全體の質料を貫く比例的均齊を「一」の節度と解するのであらうが、併しそれを以て比が絕對否定性を含むものである理由たらしめることが出來ないのは言ふまでもなからう。斯樣な節度乃至中正は所詮辯證法的媒介を意味するものでなく、高々目的論的均齊調和の原理たるに止まる。個々の比は勿論比例の均衡といへども、未だ辯證法の核心たる絕對否定態を對自的に意味するものではない。たゞ後者に於ては、超過不足の動性を其半面に含蓄するに由り、所謂質料の「二」がそれに媒介となることが暗示せられるだけである。併し質料の「二」は自己否定の原理であるから、之を媒介とするものは絕對否定態でなければならない。果して然らば形相の「一」は絕對否定の行爲的統一を意味すると解しなければならぬではないか。若し無理數論がプラトン後期の辯證法に對し指導的意味を有する

ものであつたこと今日一般に認められる如くであるとするならば、正當には比例論が直ちにプラトン辯證法の中核であつたと考へることは出來ぬ筈である。比例論の有的存在論が無化せられなければ無理數論に轉ずることは出來ない。アナロギヤはディヤロギヤを通じてディヤレクティケに發展する爲めに、一たび無の絶對否定を通らなければならぬ。全體の均齊は超過を削り不足を補ふ折中に由つて達せられるものでなく、質料の自己否定を徹底して一たび絶對無の極限に轉換し、無からの創造として絶對普遍の行爲的限定となることに由つてのみ達せられるのである。單なる比例としてのアナロギヤの主體は、分裂を含まない直接の統一として、一度も否定せられる必要が無い。然るにディヤレクティケの主體はディヤロギアの否定的對立に由つて絶對否定を通らなければならぬ。アナロギヤはロゴスに從つて昇るだけでロゴスの否定を意味しない。併しロゴスの二律背反に由る自己否定を經なければディヤレクティケは生れない。目的論の主體は觀想的に自己を保ち、辯證法の主體は實踐的に自己を否定卽肯定しなければならぬ。プラトンの辯證法は前の立場に立つものでなく後の立場に屬するものなること疑はれない。果して然らばアナロギヤもロゴスの否定（卽ちアロゴス）の否定として絶對否定を意味するといふ解釋の許される限りに於てのみ、辯證法の原理たることが出來るであらう（山内教授『アナロギヤに就いて』の論文は之を闡明して遺憾がない）。勿論此問題を決することは、原語に疎き私の能くせざる所である。併しとにかく普通の意味に從つて、

比例を意味すると解する限りは、之を以て辯證法を根據附けることは出來ない。然るに比例論、乃至比の有理數系列が接近近迫する極限を媒介として近似化せられ比例と解せられる所の切斷概念、を以て辯證法を理解せんとする說の、有力なる學者に由つて提出せられるのは、想ふにプラトン自身の、數と量とを同一視する希臘數學の幾何學的性格に從つて無理數をも量の比と看做す思想、に根據を有すると解する外無いであらう。併し歷史的でなく原理的に見れば、斯かる比例概念（近似化を含む）を以て辯證法の完全に解釋し得られるものでないことも今迄述べた所から疑はれないと思ふ。何となれば比例概念に於ては質料の自己否定性が對自的に媒介せられず、絕對否定の轉換性が自覺せられないからである。シュテンツェルは概念分割の方法を以てプラトンの後期辯證法の中心としようとしたこと周知の通りである。併しそれは却て辯證法の否定に導くべき見地なること、此方法を不完全なる推論式と貶しながら實はそれを自己の論證法の出發點としたものと解せられるアリストテレスが、辯證法を正當なる論理と認めなかつたことからも推定せられる。二分的分割は何等辯證法的自己否定を必然的に含意するものではない。然るに比例論乃至古典的切斷論も實は之を無限に推進めたものに過ぎざること曩に述べた如くである。然らば概念分割を以て對話を導いたソフィステス篇が、辯證法を主題とする限り、其中心を此處に有することシュテンツェルの解する如きものでなくして、後半部に於ける非有の論、卽ち有と非有との綜合の問題、を中心とすべきこ

とは明白でなければならぬ。併し此等前後の兩部分が如何なる仕方で論理的に結附けられるかは全く不明である。ソフィストの概念分割的規定が假托を含み、而してそれが非有の有を僭稱することに成立する所から、非有の問題に移る對話の推移は、全く偶然的に見える。然るに若し分割の有理系列が極限に於て非有と有との協同に近づくものならば、其推移の連續は一層明白に必然的に示されるのが自然ではなかつたらうか。それがさうでないのは、プラトンが辯證法的綜合を分割と連續せしめて有理比を極限的に無理數に結附けたのでないことを推定せしめる。彼は古典集合論の如くに極限の思想を以て分割と協同とを連結したものではあるまい。併し前者を種の自己否定的分裂に還元し、以て後者の絶對否定的統一に對する媒介としたのでもない。所詮當時の數學は斯かる思想を導くことが出來る段階にまで進んでは居なかつたのである。ソフィステス篇の前後の連絡の不十分なのも已むを得ない。併しながら彼が其後の對話篇に於て自己否定的質料を明に認め、之を存在の一類とする以上は、之を絶對否定に轉ずる絶對普遍の原理が辯證法の最後の根據たることは當然でなければならぬ。それが善に外ならない。斯かる善の絶對否定的原理に由つて、始めて不可分的個が極限として行爲的に發生するのである。個々の不可分形相、卽ち所謂最低種の代表する個の本質は、善の原理に依る行爲的否定的本質に外ならない。切斷としての無理數は斯かる個の否定的本質であるから、中期イデヤ論の種相が有理數的直接存在であるのとは、全く存在性を異にする。兩

者は古典集合論に於ける如く連續的に推移するものでなく、絶對否定の轉換を以て對立的に相隔てられるのである。此點から見て、ロバンが最近の著書に於てフィレボス篇の存在論を敍述するに際し、所謂存在の類(卽ち存在の構造契機)として、一、質料たる不定の「二」、二、形相の「一」、三、混合物、四、混合の原因(プシュケ)の外に、第五類として混合の規準を擧げたのは、正當といはなければならぬ(Robin, Platon, p. 154—170)。たゞ併しながらプラトンの本文其ものから、斯かるものを明瞭に讀み取ることは必ずしも容易ではあるまい。それは善も形相として單に質料に對する形相と同一視せられ、後者の外に絶對否定の統一として明確に區別せられるのでない樣な傾向が、プラトンに於て最後まで完全には淸算せられて居ないと思はれるからである。其由來は質料を自己否定の原理とすることがなほ十分に徹底せられないで、單に無記なる場所(空間)と同一視せられ、力學的場が幾何學的空間に還元せられるのと伴つて、之を形相化する原理が絶對否定的統一でなければならぬことが完全には自覺せられないからである。希臘の藝術形成的存在論の限界が其處にあること否定出來ない。それに由つて質料もなほ何等かの統一性を保つて最高の形相的統一の內部に包容せられ、從つて最高の統一も絶對否定的普遍でなく直接的形相的統一であることを免れなかつた。卽ち絶對無の統一でなく絶對有の統一なのである。寧ろ絶對無の統一といふ如きものを更に形相と區別して考へることが希臘に於ては困難であつたのであらう。其故ロバンがプラトンの本文を出て斯かる原

理をはつきり取出したことは、解釋としては歴史的といふより寧ろ體系的といふべきであらうか。併し之を以て直ちにそれを新プラトン派的解釋であるといふことも出來ぬと思はれる。何となれば、プラトンはプロティノスの一者の如き絶對有の原理を認めたとはいへないけれども、反對に絶對否定的統一の原理を形相の「一」に卽して認めたことは必ずしもあり得ないとはいへないからである。たゞ希臘的存在論の制限の下にあつて、之を絶對無の統一として別に說くことは出來なかつたのである。寧ろ之をプロティノスに於ける如く明白に絶對有の原理として別に說かなかつた所に、或は彼の認めた最高の統一原理が有の直接存在性を超えて行の絶對否定性を意味するものであつた長所を有すると解することも出來なくはあるまい。新プラトン派的絶對有の一と區別せられ、飽くまで形相の實踐的行爲的一に卽してのみ自己を實現する絶對否定的統一が、プラトンの意中にあつた最後の原理であつたといふ解釋は、必ずしも實らしからぬものとはいへないであらう。彼の實踐的要求の强さ、その質料の自己否定的傾向の顯著なること、從つて後期辯證法の眞に否定卽肯定的なる具體性に殆ど完全に到達せること、などから考へて私は斯く信ぜざるを得ない。辯證法の根據として辯證法を超える絶對一の直觀をプロティノスの如くに考へなかつた所に、プラトンが所謂神祕主義者でなく實踐的信念の政治家的哲學者であつた面目があるのではないか。プロティノスに於ての如くに辯證法が超越的直觀の準備たるのでなく、それが直ちに內在卽超越の關係に於て絶對否定の超越的

統一を內在せしむる行爲的媒介の論理たることが、プラトンに於ける辯證法の特色であらう。論理を否定して論理を根據附ける最後の統一も論理を超える直觀であるよりは、論理の否定卽肯定として論理と相卽する實踐的絕對否定の媒介性に外ならざることが、プラトン辯證法の具體性である。ヴントがパルメニデス篇の解釋に於て採つた樣なプロクロス的新プラトン派的解釋は、確にプラトンから離れるものであらうが、斯かる超越的積極的解釋とバーネット、テイラーの消極的解釋との間に、第三の否定卽肯定的、消極卽積極的なる解釋がある筈である。一見消極的に見える自己否定的破壞の辯證が、其辯證の論理的活動に於て實踐的に絕對否定の統一を感得せしめ、積極的に超越的一を自證せしめる。論理の自己否定的葛藤が直ちに正法眼藏道得の意味を有し得るのではないか。これは行爲的直觀といふ如きものより一層辯證法的といはれるであらう。論理そのものが否定卽肯定の絕對媒介的行爲に於てはたらかない間は、辯證法といふものは十分なる意味を有することは出來まい。プラトンは後期に於て辯證法に就いて語るよりも寧ろ之を使ふこと多く、プロティノスは辯證法を主題として語りながら之を使ふことが少ないのは、其間の消息を語るものではないであらうか。

而して右に述べた所を承認するならば、所謂絕對媒介の論理として私が種の論理と呼んだものが、コーヘンの根源の論理と軌を一にするものである、といふ如き私にとつて甚だ意外なる解釋は、最

早發生する餘地をもたぬであらう。私の種と呼ぶものはプラトン的質料であつて、自己否定を本質とするテンソル的力學的契機である。その連續性は、單に全體が部分に先だつ內包量として、無限分割の極限たる微分を原理とするに由來するものではない。元來微分の消滅性否定性は分割的思惟に屬するものであつて、微分自身が對自的に自己否定的たるのではない。如何に分割を進めても達することの出來ない分割の極限は、最早延長の可分性を否定せられたものとして外延量の無でありながら却て延長がそれに依つて成立する所の、延長の創造的根源である、といふ意味に於ける微分の內包量的原理は、飽くまで反省的思惟の肯定に終始するものであつて行爲に於ける思惟の否定を對自的に意味するものではないのである。微分は無を志向するとしてもそれ自身は飽迄有であり、寧ろ有の根源である。併し有の根源たる無の實現としての行爲的否定は微分の含意し得る所でない。從つてそれは飽くまで單にヴェクトル的運動學的であつて、テンソル的力學的でない。無を豫想してそれからの創造を直接に肯定するだけで、自己の無が卽有であるといふ否定轉換を意味しない。微分は自己否定を含む絕對否定ではないのである。コーヘンの微分に無といふことがいはれるのは單に志向せられた對象の無であつて、それは却て思惟の有であり直接肯定である。思惟そのものの自己否定たる無ではない。それが依然として有の立場に立つ所以である。恰も直觀的全體が縱、絕對無と稱せられても、實は非辯證法的直接態に止まる限り有に外ならざると一般である。斯くし

て、カントの所與質料とした感覺的直觀が、コーヘンに於ては思惟の課題として思惟作用を覺醒するものと考へられ、思惟對象の無にして却て思惟作用の根源たる內包的全體の動的尖端としての微分を藏すると解せられることに由り、感性が悟性に相通せられ、感覺が思惟に連續化せられるのである。論理に對する直觀を、論理の否定でなく單なる論理の缺如と解し、その缺如としての無を無限小たる微分の媒介に由つて有と連續せしめ、直觀に於て論理の課題乃至始源を觀んとするのが、コーヘンのカント解釋の要旨である。其故彼が極力アリストテレスを貶してプラトンを揚ぐるに拘らず、實はプラトンの後期辯證法の立場に立つものでなく、單にアリストテレスの潛勢をライプニッツの微分で置換へ、之を以てプラトン論理と解するものに外ならない。然るに私がプラトン論理の骨子と考へるものは、後期辯證法に於ける自己否定的質料の絕對否定的轉換に存する。其基體たる質料の構造はヴェクトル的でなくテンソル的でなければならぬ。眞の連續は運動學的に理解せられるものでなくして力學的にのみ理解せられるのである。其限りコーヘンの連續の論理は微分に止まるべきでなくテンソルにまで發展すべきものであつたといふことも出來る（佐藤省三氏『高次の方向量の論理』の着眼は此點から推奬に値する）。併しそれが爲めには、コーヘンの如くカントの分析論に留まるのでなく彼の辯證論の立場に進み、一度思惟を自己否定せしめなければならぬ。斯くして連續の根源は、單に微分の如く缺如の極限を課題の存在に繫ぐ肯定的原理にあるのではなくして、自

己否定の極、無からの行爲に於て絶對否定の肯定に轉換せしめられる否定卽肯定の辯證法的原理となる。前者は思惟の立場に終始するに對し、後者は思惟其ものの否定斷絶を含むが故に、行動實踐に由つてのみ媒介せられるのである。カントが辯證論に於て思惟の自己否定に由り否定せられた純粹理性を、實踐理性として肯定したのは其意味に於て正當である。私が媒介と呼ぶのは、決して單に理論理性の思惟的推論を意味するのではない。繫辭の綜合さへも實踐的統一に依ると考へる私にとつては、推論の媒介が實踐的であることはいふまでもない。ヘーゲルの推論といひ媒介と呼ぶものも、勿論具體的には人倫實踐的なることは、其媒介者たる概念の本性上から疑を容れない。彼の論理に於ける理性は、カントに於て論理的に統一せられなかつた理論理性と實踐理性との統一、なること明白である。これはコーヘンの數學的物理學的（而も現今認められる辯證法的性格をまだ全然もたなかつた十八世紀的機械論の）立場に立つ根源論理の與り得ざる所である。然るに私がヘーゲルをコーヘンに還さうとする意圖を有する如く解せられるのは、全く私にとつて意外といふより外無い。ヘーゲルに對してなほカントの省みらるべき點あることを私が說くのは、カントの辯證論に於ける理性の自己矛盾性が辯證法の樞軸たることを輕視する結果、ヘーゲルの辯證法が和解統一の方向に一面化せられて、それが單に存在の論理として直接に肯定せられ、カントの示した如く理性の肯定が實踐的にのみ制限せられることも、却てヘーゲルに於て輕視せられんとする傾向が無く

もないことを注意した爲めである。それはヘーゲルをカントに還すことを意味するよりも、寧ろヘーゲルをそれの本來に還して、却て是に由りヘーゲルを徹底せしめんとするものに外ならない。それが決してコーヘンの如くカントの辯證論ならぬ分析論を、ヘーゲルに對し擁護しようといふ意味でないことは、少し注意して私の書いたものを讀まれる人の明かに認められる所であると信ずる。

五

前節に見た如く、無理數の切斷は固定せられた直接存在でなくして、自己否定的なる種の矛盾的に對立する二つの契機としての有理數の反對方向をもつ系列を交互否定の無の底から行爲に於て有に轉じ、絶對否定の肯定に統一したものである。それは交互的に否定し合ふ絶對的に對立するものの統一として、連續の要素となるのである。その對立を統一する原理は絶對否定的統一性であるから、反對の間を張渡す基體としての種はそれに於て一たび絶對に否定せられるのである。その絶對否定の底から肯定的なる統一が行爲的にはたらき出すのが個の切斷に外ならない。基體の否定の底から主體が生れるのである。基體卽主體とは此轉換を謂ふ。此轉換は其故絶對否定を媒介とするのであつて、苟も有としての基體的なる媒介は完全に自己を否定しなければならぬ。之を無媒介に絶對々立者が統一せられると言つてもよい。斯かる無媒介なる統一は從つて全く突如として行はれる外無い。時間的にいへば無時間的に一瞬に起るのである。これがパルメニデス篇に於けるエクサイ

フネス(突如)の意味である。連續は却て連續的なる基體の完全に否定せられた底から突如として對立者の統一せられることに由つて成立し、運動そのものは始と終との間に起る過程の否定せられた極に於て過程の經過なき一瞬に起るのである。これが無理數の切斷の意味である。併しながら此樣な突如たる一瞬は切斷の構造に就いて今迄屢々述べた如く、單なる非連續でなく單なる靜止ではあり得ない。飽くまで自己否定の對立が絶對否定の統一に轉ずる純動であり轉機である。所謂非連續の連續であり、運動の經過無き純動でなければならない。さればと云つて、それでは斯かる純動がそれ自身で存し、所謂非連續の連續がそれだけで成立つのでもない。若しさうならば、無理數は有理數系列の切斷として定義せられる必要が無い譯であつて、無媒介的に定立せられ得る筈である。それは辯證法的でないといはねばならぬ。若し非連續の連續がそれだけで直觀せられるならば辯證法は不必要なのである。ノエマに對するノエシスの優先がノエマの自己否定に媒介せられたものでなく直接的なるものであるならば、非連續の連續が直接に可能な譯であつて、同時に辯證法は無用に歸する。辯證法は前なるものが後であり、根源的なるものが同時に媒介せられたものとして、一切の直接なるものが否定せられ媒介せられる所に成立するのである。非連續の連續は連續の自己否定として連續の否定せられた極に於て却て連續が絶對否定的に成立する轉換媒介を意味するのでなければならぬ。その直觀を行爲的といふのは斯かる否定轉換的媒介が行爲に於てのみ起る

からである。併しそれが斯樣な否定的轉換であるならば、實は論理の轉換媒介の自證の外に行爲の直觀は無い。否定的媒介といふことが論理に外ならないからである。行爲は論理と相卽することに由つてのみ基體の主體化として成立する。其外に論理を超えて別に直觀せられる無媒介なる內容があるならば、それは直接なる非辯證法的神祕でなければならぬ。それは絕對無と呼ばれても實は絕對有なのである。所謂、知佛法者必得罰行佛法者必得利生といふ如き戒は、斯かる直觀主義にまで及ぶものと考へなければならぬ。却て非辯證法的なるアリストテレスの純動としての觀想がこれを典型的に代表する。希臘的有の存在論が其處に最も完成せる姿で表現せられるのである。彼がプラトンから出ながらプラトンの辯證法を斥けて論證法に徹底した所以である。而してプロティノスがアリストテレスに反對してプラトンに復らうとしたにも拘らず、右に述べた如くプラトンに於て積極的に說かれずに實踐的絕對否定として形相の統一に相卽せしめられた絕對統一が一者として取出され、それが辯證法的轉換媒介の行爲を超えて直觀せられるものとなつたのは、アリストテレスの觀想直觀に媒介せられた結果であらう。たゞプロティノスに於ては辯證法が直觀の媒介と考へられた所にプラトン主義の復興がある。彼に於ては一者の直觀、一者との冥合、一者そのものの耀き出ること、は魂の淨化を媒介とするのであるが、魂の淨化はそれの繫縛せられる肉體から解放せられ、肉體の物質性に由つて自己の外に存在する客體の感觸に拘束せられる個人主觀の制限を脫却し

て、純粹活動に高められた觀想作用と、物質の自己否定性の絕對否定的に否定卽肯定せられ絕對統一の原理としての一者の溢出たる意味を賦與せられた形相の觀想せられる內容と、の合一としての理性にまで上昇することに外ならない。理性に於ては理性の存在とそれの作用とそれの對象とは合一するから觀られる客觀は觀る主體と歸一し、魂の段階に於て分離對立の否定的原理であつた物質性質料性が絕對否定的に否定せられて、對立的統一性の媒介にまで止揚せられた所謂理性的質料となり、これに由つて理性の全體たる所謂大全理性とその個體たる各個理性とが對立的に相卽し、大全理性は現勢的に大全理性にして潛勢的に各個理性であり、各個理性は現勢的に各個理性にして潛勢的に大全理性であることになる。斯かる理性の辯證法的絕對否定的統一に於て一者は自己を顯現するのであるから、辯證法的に媒介せられて理性に上昇した魂は、更にそれの第一の基相本源としての一者に憧憬する。而して此上昇に於て淨化せられる向上の途が却てそれに於て一者の光の溢れ耀く下降の途なるに由つて、一者の自己直觀を通して一者を直觀することが奪魂忘我の狀態に於て行はれるのである。こゝにアリストテレスに於て無媒介に純粹活動として自己の作用を觀ると考へられた觀想の觀想なる純粹觀想が辯證法的に媒介せられたものとなる。縱、美的觀想の直接性を完全には脫却せず、絕對否定の實踐的媒介を超えて辯證法の極限たる一者を絕對有の原理たらしめるとはいへ、アリストテレスの直接性を止揚するのは辯證法の威力に依るといはなければならぬ。特にア

リストテレスの純粹活動が無媒介にして全く運動と離れ考へらるゝことの困難に鑑みてこれに反對し、運動と活動とを相卽せしむること (Enneades VI, I, 16)、同時にプラトンが例へば其分割法に根據となる如き悟性的分析論理と理性的辯證法とを媒介せず、前者の二律背反的自己否定を媒介とすることに由つてのみ後者の絕對否定が可能となることを十分明かにせず、分析論理其ものが質料性を含みて否定的たる所以を考へなかつた結果、所謂突如瞬間の切斷的無理數的要素と有理數系列との媒介關係を闡明し得なかつたのに對し、アリストテレスの存在論に固有なる潛勢現勢の形而上學的範疇を繼承適用して大全理性と各個理性との相卽を說くことにより (Enn. VI, 2, 20)、此問題解決の鍵を提供することは、相俟つて類個の相卽と種の媒介性とを規定する指針を與へるものといはなければならぬ。もとアリストテレスの潛勢現勢の範疇は運動の辯證法的事態を分析論理の論證法的立場に支配せられ得るものたらしめる爲めに案出せられたものと考へられるが、之を以て辯證法の代理たらしめることの不可能なるは、恰も極限法を以て辯證法に置換へることの不可能なると同樣である。それは所詮矛盾律を維持する爲めに否定卽肯定の飛躍的統一を過程的に媒介しようとする機構に止まるから、畢竟問題を先に押し遣るだけで之を解決するものではない。其限り辯證法に對し潛勢可能の概念が不適當なるものであり說明の用に立たないものであるといふのは正しい。我々はヘーゲル自身にさへ殘留する、潛在的なるものの發展の思想を完全に淸算するのでなければ、絕對否

定の立場を徹底することは出來ない。有の立場を一度完全に行詰まらせなければ無の立場は生まれないのである。併し此事は潜勢の概念が辯證法に對し無用であるといふ意味に解せられてはならぬ。悟性の否定的媒介が無ければ理性の辯證法は論理とならない。若し全然分析論理の否定的媒介を缺くならば辯證法は神祕主義に歸する外無いであらう。悟性論理の避け難き二律背反性を明にしたカントの辯證論がヘーゲルの辯證法の歴史的前提であつたことは、體系的にも重要の意味を有する。而して二律背反はアリストテレスに於ての如く分析的立場の徹底を通してのみ始めて現はれることが出來るのである。潜勢現勢の概念は斯かる意味を荷ふ。プラトンが斯かる分析論理徹底の媒介を有しなかつた爲めに、其辯證法を十分具體的ならしめ得なかつたのは是非も無い。同時に彼の要求する如き實踐の立場も論理に媒介せられなければ具體化せられることが出來ぬ。實踐は論理と相卽すること曩にも述べた如くである。突如瞬間の辯證法的統一は却てその瞬間を媒介する過程を離れては無内容に歸する外無いこと、無理數が有理數の系列を離れて規定せられないと同樣である。而も媒介系列が綿密であればある程統一が具體的となる。アリストテレスの潜勢の概念は斯かる媒介の役目を果たすものに外ならない。プロティノスが之をプラトンの辯證法に媒介する途を示したことは非常に重要なる意味を有するといはざるを得ない。

アリストテレスの理性が觀想の觀想、思惟の思惟として純粹活動と考へられたことは改めて言ふ

を俟たざる所であるが、而も斯かる純粹活動がなほ思惟の思惟である以上は、思惟する思惟と思惟せられる思惟との對立が同一思惟として統一せられるといふ媒介を含まなければならぬことは明白であらう。純粹觀想もなほ異にして同、二にして一といふ構造を含まなければならない。更に言へば同一なる純粹觀想も作用的自己と對象的自己とに分裂する下降的方向とそれの統一に復歸する上昇的方向との統一としてでなければ成立することが出來ぬ。卽ち對立に分裂する方向と、統一に復歸する方向との統一、といふ二重の統一としてのみ可能たるのである、或は之を多と一との對立(多)の統一(一)といふことも出來る。此は正にアリストテレス的ならぬプラトン的意味に於ける辯證法的事態に外ならない。果して然らば、純粹活動も分裂の下向的方向と統一に復歸する上昇的方向との運動を媒介するものであつて、運動の自己否定の絕對否定的轉換としてでなければ思惟せられないことになる。全く運動を媒介としない純粹活動なるものは具體的には思惟せられないこと、恰も自同的統一が矛盾的に對立するものの媒介的統一としてでなければ具體的には思惟せられないのと一般である。分析論理が辯證法の抽象面に外ならざる所以である。然るに運動はアリストテレスに據れば質料の潛勢が現勢に轉ずる過程に外ならない。從つて純粹活動として純粹形相と考へられた純粹觀想も實は其內部に質料を含み運動を媒介とするのである。プロティノスが理性に理性的質料を認めて之を多の原理とし、運動を活動に相卽せしめたのはこれが爲めであらう。彼が感性的質料と區別して理

性的質料を神的質料と呼び(Enn. II. 4 5)、而して之を「生ける質料」と稱して魂と同一視したのは(II. 5. 3)注目に値する。それは絶對否定的統一の原理たる一者に由つて理性化せられ、理性の契機たる多の原理に化せられるけれども、プロティノスの發出的思想が一見然か思はしむる如くに理性の內部から發出せられるものでなく、寧ろ理性の統一に對する否定契機として自己否定的分裂の原理たる感性的質料が絶對否定的に否定せられ理性の統一に媒介せられたものに外なるまい。それであるから逆に理性の統一が感性的質料の爲めに分裂せられ多化せられて、一と多との對抗共存として現はれる魂が直接には理性的質料に外ならないと解せられるのであらう。而して斯樣に魂の生命的運動を否定契機とするのでなければ理性の純粹活動も具體的に媒介せられないから、プロティノスが活動を運動と相卽せしめるのは正當である。惡無限的なる存在の運動が眞無限的なる主體の行爲にまで否定卽肯定せられたものが、純粹活動に外ならない。從つて純粹活動はアリストテレスの考へた如く一方的に運動の目的因として運動を媒介するものであることは出來ぬ。若し單に斯かるものと考へるならば、それは彼の意志に反して再び中期プラトンの形相離在の說に陷る外無いであらう。之を免れるには活動が運動を契機とし形相が質料と相卽するとしなければならぬ。卽ち質料は單に形相の缺如に止まらずして形相の否定契機となり、質料の潛勢は形相の現勢を規定するものとならなければならぬ。約言すれば目的手段の一方的なる關係が交互的媒介の雙方的關係に轉せられなけれ

ばならぬ。潜勢と現勢とは單に連續過程に由つて繫がるのでなく否定轉換に由つて媒介せられるのでなければならぬ。アリストテレスも運動變化の一種たる發生消滅に於ては存在と非存在との合一といふ矛盾の統一が含まれることを認め、而して又如何なる變化にも一般に此發生消滅の契機が伏在しなければならぬことを承認する以上は(Aristoteles, Physica. VI, 5. 235 b 13, 19, 30)、運動の内に絶對否定の契機が入込み活動が含まれることを拒むことは出來ないと同時に、見るとか思ふとかいふ活動に於て明かなる如く、活動現勢も運動の過程と結果との合一として考へられるとする限り(Metaphysica Θ, 6. 1048 b 28)、活動の内に運動が入込むことを認めなければならなかつた筈である。それであるからプロティノスが潜勢と現勢とを互に含み含まれる關係に於て相卽すると考へたのは、彼がプラトンの辯證法とアリストテレスの分析論理とを媒介綜合する立場に立つものとして當然でなければならぬ。ヘーゲルの論理學に近きものを此處に認めるとしても必ずしも不當とはいはれないと思ふ。斯くて彼は此潜勢現勢の相卽を以て理性の全個相卽の關係を理解しようとしたのである。學問が學問としては全體が一の學問であると同時に、又それが種々の學に特殊化せられ、而も後者は單に前者の部分でなくして雙方が互に貫き合ふ如く、理性は何等特殊に拘りなきものとして現勢的に大全理性でありながら潜勢的には個々の理性の全體であり、同時に個々の各個理性は現勢的に自己自身であると共に潜勢的には凡ての特殊なる理性の總體であると說く(Enn. VI, 2, 20)。卽ち大全理性と各個

理性とは異にして同、互に含み含まれるのである。それは正に私の曩に考へた類個の關係に外ならない。辯證法的に對立の統一をなす全體と個體との關係を自同論理の矛盾律支配の下に於て分析的に理解しようと欲するならば、潜勢現勢の範疇に依る外に途は無いであらう。辯證法の說明に此範疇概念の屢々適用せられるのは理由無きことではない。プロティノスの着眼は鋭いといはなければならぬ。

併しながら進んで考へると潜勢現勢の範疇はもと運動の理解から發達したものであることといふまでもない。右の叙述も此關係に基いてなされたものである。然るにプロティノスの理性は今述べた如く理性質料を含み、其活動は運動と相卽するといふも、所謂理性質料は當時注意した通り魂に相當するものとして全く理性に內在する一面からのみ考へられ、それが却て感性質料の自己否定性の絕對的に否定せられたものたる他面が閑却せられて居る。從つて理性の永遠は却て魂の時間性を媒介とするといふ意味を有することが出來ず、たゞ永遠が時間に其影を映すといふやうに考へる。それであるから、活動が運動と同一視せられるのは、プラトンのソフィステス篇に於て運動が存在の高次なる大類として單に對立間の辯證法的媒介を意味した意味に於ての運動が、活動と同一義に解せられるに止まり、曩に見た如くに運動が絕對否定的に活動と相卽するといふ具體的意味を表はすことが出來ない。約言すれば上昇は下降と卽し、往相は還相と伴ひ、全體の思想が兩面的二重的で

あり交互統一的であるといはれるに拘らず、依然として上昇的往相の肯定面が優越し、下降的還相の否定面が十分に其否定的媒介性を發揮しないのである。それが希臘的美的存在論の宗教的昂揚たるのは是非も無い。其原因は畢竟、質料の自己否定性が存在の媒介たる意味を十分に發揮せず、流動分裂否定暗黑の原理たるも飽迄形相の形成力に對し從順にして(Eun. II, 4, 8)、たゞ一を一として統一の緊張たらしむる爲めの多の原理たるに止まり、却て形相の統一に入込み其內容を規定する如き媒介性を有せざるに存する。若し言ふことを許されるならば、理性の類個的統一に對する種の自己否定的構造の媒介性が十分に認められない爲めであると云ひたい。我々はプロティノスの思想がプラトンとアリストテレスとのもつ抽象を具體化して、兩者の綜合に辯證法的存在論の基礎構造を示したことを感嘆せざるを得ないに拘らず、同時に其制限を蔽ふことも出來ない。端的にいへば、運動の自己否定性を無視するとは存在の時間性歷史性を無視することである。時間は永遠の影であるばかりでなく永遠の媒介である。存在を運動に卽して考へるとは存在を歷史として把握することである。更に質料の種性は具體的存在の社會性の根柢である。其故前者を閑却することは存在を社會的存在として捉へることの不可能を意味する。約言すれば存在の社會的歷史的構造はプロティノスの存在論の能く示す所でない。彼の重要にして困難なる範疇論は、プラトンのソフィステス篇の理性的辯證法的範疇を以て經驗界のアリストテレス的範疇を根據附けることを、主たる課題とするものと解

せられるが、逆に空間的時間的現象界の範疇が自己否定的質料として理性的實在の範疇に對し否定的媒介となる方面は無視せられる。高きものが低きものの根據たるには先づ低きものへ降り來り、低きものを自己に攝取しなければならぬといふ、辯證法の根本思想は、縱、プロティノスの基相 Hypostasis が無媒介に思惟せられず常により低きものの基底たる還相面から媒介的に思惟せられることに於て其思想の深き具體性を示すとはいへ、尙高きに休らひ、その力の充溢がおのづから低きものに流出して之を向上せしむること、宛も光の充溢が闇を消滅せしめて明に向はしめるに等しき、自己充足性を免れない。存在が自己否定の極、無からの行爲に轉ぜられる絕對否定の轉換は、其處には十分對自的にならぬ。事々無礙の絕對理性に融かさるゝ善美合一の存在界が攝理の光に浸徹せられても、自己を無に歸する行爲に於て罪惡が直ちに恩寵の媒介たる如き愛の宗敎には達しなかつた所に、なほ辯證法的否定の不十分さがあるのであらう。私は今古代存在論の批判を意圖するのではない。とにかくプロティノスに由つて敎へられた辯證法と分析論理との媒介相卽の思想を以て、再び種を媒介とする類個の存在の問題に歸り、今述べたやうな空間的時間的質料を媒介として存在の社會的歷史的構造を理性の絕對否定的統一に媒介する途を幾分でも切開かなければならぬ。

六

辯證法を實踐的存在の論理として具體的ならしむる爲めには、自己否定的種を質料としてはつき

り認めることが必要である。質料を單に流動分裂不定暗黑などといふ如き抽象的觀念に止めず、又單に統一に對する多樣とか、靜止に對する運動とかいふ如き、基體それ自身でなく基體に內屬する規定である、とする考方を廢するのでなければ、存在の具體的なる理解は不可能である。此點から端的に質料を物質と呼ぶのが適當であるといはれないこともない。たゞ物質といへば機械的唯物論が曾て思惟し、今日も通俗の臆見が斯く解する如く、空間を占有して運動により其位置を變ずる基體が理解せられ易い。併し今日は物理學といへども最早斯かる物質を最後のものとは考へて居ないのである。今日物質の最後の要素と看做されるものは微粒子にしても波動にしても何等かエネルギーの空間時間的配合と考へられる。その存在は例へば曩に述べたやうな不定性原理に支配せられる統計的效果とか、或は波動力學の場合には確率波とか、いふ如き、全く數學的なる概念を以て定義せられるのであつて、決して直接に感覺に與へられるものではないのである。感覺的なるものも勿論其存在の決定に參與するけれども、それは否定的に數學の概念と媒介せられなければならぬのである。決して單に感覺的知覺に由つてそれを直接に捉へることは出來るものでない。辯證法的絕對否定の媒介が此場合にも感覺を數學の概念に媒介するのでなければならぬ。其限り物質の存在も辯證法的に論理化せられるのである。近く行はれたアインスタイン、ボーアの論爭の如きも此見地から批判せらるべきであらう。とにかく今日物質は、曾てヘーゲルがフェノメノロギーの中にいみじ

くも規定した如く、感覺的にして非感覺的なるものといふ意味を具體的に實證的研究の理論に於て發揮しつゝあるのである。斯かる辯證法的意味に於て概念と媒介せられたものをその基體性に於て物質と稱するならば、質料の代りに物質と呼ぶことが一層明確であるともいはれる。併し今日の語用に於て物質の語が常に斯かる具體的意味に於て理解せられるとは期待し得ない現狀に於て、それの基體的契機性が一層はつきりして居る質料といふ語を私は依然として用ゐることにしよう。それは今日既にヨルダン (P. Jordan, Anschauliche Quantentheorie) などに由つて提唱せられて居る如く、有機體の生活物質に連接するものと考へられる。斯かる質料を私が種と呼ぶのは其論理的構造が初に述べた如きものであるからである。其際特に重要なことは、質料が分裂性多樣性といふ如き抽象的規定を意味するのでなく、その自己否定は種が種を否定することであり、而も其等の種が互に對立する別個のものとして單に並存するのでなく却て相互に含み含まれ連續的に相連なるものの內部に於て一部が他部を否定することを意味するにある。如何に分割するも最早分割する能はざる所謂不可分者(原子)に到達することなく、斯かる單純要素を有するのでなくして、如何に分割を進むるも分割しない前と相似の、反對力の張合ふ構造を示すのが種の特色であつて、私が之を前にテンソル力場に比したのも其爲めであつた。斯く力學的に緊張せられた二重の對立をもつ直接の動態は之を力場の概念が示唆する如く力學的空間に比較して考へることが出來る。對立するものが同時に共存して

互に張合ひ而も一方に他方が互に反對の緊張契機として入込み合ふ構造は、空間の連續に比するのが當然であらう。種的質料は空間の具體的構造に相當する。プラトンが質料を錯動原因として自己否定的に考へると同時に之を場所として空間に擬したことは理由のあることである。所謂非有としての質料の二つの意味は排他的でなく補足的であるといふべきであらう。私が前に種の相違的連續態を比較した色の連續體の如きものが、所謂色彩空間などと稱せられて空間に擬せられるのも、甚自然の事と考へられる。併しながら種の比較せられるのは力學的空間であつて幾何學的空間ではない。種は後者の如く無記無內容の抽象的連續でなくして、前者の如く力の二重對立的張合であるから、それは前に形容した如く狂瀾怒濤の大海に比せらるゝ動亂激動そのものに外ならない。それに於てあるものは一部が他部に否定せらるゝ否定の重疊であるが故に、却て一の力が他の力を壓して自己のはたらきのみを運動に現はすことなき緊張張合たるのである。其意味に於てそれは純然たる動の張合ふ動的均衡ともいはれる。併し此の如き構造を有する種は其自身に於て存在するものであるとはいれない。それが非有と呼ばれた質料に相當する所以である。非有とは空虛の謂ではない。却てそれは存在の基體であり根柢である。併しそれは存在に向ふ一部を他部が交代的に限無く否定する爲めに、存在に達することが出來ない所の、存在と非存在との張合なのである。其故それが存在に達することが出來る爲めには、それの斯かる自己否定性が絕對否定的に肯定せられるのでなけ

ればならぬ。卽ち存在は直接なる肯定でなくして否定を媒介とする肯定であり、却て非存在を自己に含みて之を止揚する存在たる外無い。行爲に於て否定的に存在する個にして始めて、眞に存在するといはれるのである。それは絕對無としての絕對普遍に於て媒介せられたる存在である。存在の認識が直接的現前でなくして判斷に屬するのもこれが爲に外ならない。單に直接的なる內容は存在と非存在との交互否定であつて存在とはいはれない。存在が非存在に自己の外から侵害せられ否定せられては存在に達することが出來ぬ。絕對否定に由つて非存在を自己の媒介に轉じた存在のみ眞に存在することが出來るのである。存在が辯證法的なる所以である。種の自己否定の絕對的に否定せられた肯定態が個の存在なのである。個は一たび種の全體が自己否定的に自己を消滅せしめた無の底から絕對否定の轉換に由つて否定を媒介とする肯定として現はれるのである。ところで種は今述べた如く力學的空間に比すべきものであつた。然るに力學的空間は幾何學的空間と異なり動として其はたらきを現はし得る力の張合ふ動的均衡であるから、それは幾何學的空間が純粹空間ともいふべきものなるに對し、時間を含む空間といふことが出來る。力は運動の原因と考へられ、而して運動は空間の時間化であるから、力學的空間は再び其空間の時間化を空間に止揚して時間を內に湛へる空間と考へられる。それに對し個の存在は斯かる種的空間の含む時間性が解放せられ、力が運動に於て其はたらきを現はすものと解せられるであらう。併し運動は單なる時間ではない。空間の時

間化ともいふべきものであるから、個が時間的であるといふのも空間を含む時間の謂でなければならぬこと、恰も種の空間的といはれるのが時間を含む空間でなければならなかつたのと同樣である。具體的には空間は時間を含み時間は空間を含むのである。物理學的にも相對性理論が兩者の相卽聯合を明かにしたのは當然の事でなければならぬ。たゞ種の空間性は時間性を自己否定せしめんとするものであり、是に反し個の時間性は空間性を肯定的に否定し、自己に媒介するものである點に、兩者の相違があることは見逃せない。空間の種的自己否定性は力的均衡であるから極微的に運動として現はれる力のはたらきの動的に緊張せしめられ時間性が自己否定せしめられたものと考へられる。それが全體交互的に否定し合ひ其否定の極が絕對否定的に肯定に轉せられて現はれるはたらきが時間的なる個の存在に外ならない。其場合に宛も如何なる運動ヴェクトルも他のヴェクトルの合成と考へられ、無限なる全空間のヴェクトルをとれば如何なる一も全體の合成の結果と解し得る如く、個は種の全體の自己否定の肯定に轉せられた結果であると同時に、それは既に種の內に存した或力のはたらきに相當するのである。種が個の根源といはれる所以である。たゞ運動のヴェクトルに於けると異なり、個に於ては種の全體の自己否定の絕對否定に轉せられた媒介性が對自的となつて居るから、それは種に於けるそれの對應者たる力の實現たる意味を有する。然るに力は常にそれの反對力の張合に於て種としてのみ存することが出來るのであるから、個に實現せられる力といふ

のは特殊の種に外ならない。卽ち全體の連續の一部として種に於ける種といふべきものである。生物は斯かる個的種ともいふべきものではないであらうか。人間に至つて始めて、個の對自態が自覺せられ、行爲的存在として主體化せられる。斯くて特殊の種が特に個の根源として後者に代表實現せられ、個に於て絕對否定に媒介せられる。而も種は如何に特殊なるも其自身が一の連續體として無限に多くの種を含むから、それ等の種に對應して無數の個を代表とすることが出來る。斯くして個の多數が同じ種の實現と考へられ、斯かる個が同じ種を其根源的媒介として有することが出來る。其場合如何なる範圍の種が同種と考へられるか、幾何の個が同じ種の代表實現と看做されるかは、種の親近性と個の自覺の可能範圍とに依存するといふ外ない。とにかく個の絕對否定的轉換の自覺は必ず或範圍の特殊的種を全體の中から限つて自己の根源的媒介とし、而して同時にその種自身がそれの連續可分性に由つて更に種を含む相對的類の意味を有するから、個は自己の外に多數の個が同じ種を根源とし、種の同一を媒介として一の全體を形成することを自覺する。これが種を媒介とする個の全體としての類に外ならない。斯くして單に種の立場に於て相對的に止まる所の種的類ともいふべきものが、個の成立する絕對否定の媒介に由り絕對的類として個に卽する全體となる。ところで曩に述べた如く、種は時間を直接否定的に潛在せしむる空間に比せられ、個は空間を否定的媒介とする時間に比せられる。從つて類は空間と時間との具體的に媒介せられ綜合せられた世界に

比せられることは當然であらう。類に於て種と個とが絶對普遍の原理に由つて相互否定的に媒介せられるのは、正に世界が空間時間の否定的統一たるに相當するからである。

併しながら今まで述べたやうな空間時間の互に含み含まれる關係はこれだけでは未だ十分具體的とはいはれない。それは兩者の構造そのものが具體的には相互に對立する他者を契機として含むといふ一般的關係以上に出でないからである。其程度の空時相卽の關係は例へばカントの先驗分析論に於てさへ既に認められたのであつて、未だ相對性理論の敎へる兩者の不可分的聯合に比せられる如き具體性をもつものではない。私は從來此理論に導かれて存在論的世界圖式の必要を唱へた。併しその考方がなほ十分に具體的たり得なかつたことも、私の率直に認める所である。今此點を右に述べた如き類種個の媒介關係から一歩精密に規定することが出來はしないかと思ふので、今少し立入つて考へて見たい。前にも述べた如く種の自己否定性は單に抽象的なる分裂とか矛盾とかいふ如きものでなくして、實際に種と種とが否定し合ふ關係を意味するのでなければならなかつた。それであるから之を反對する力の張合に比したのである。然るに力は運動として其はたらきをあらはすものであるから、時間の動性を張合はせ否定した動的緊張として種的空間が考へられるのである。ところで時間の動性の張合ふことは既に時間自身にも含まれる契機なのである。若しさうでなかつたならば時間の動性を張合はせることは時間を消滅せしめない限り出來る筈はない。併しそれは時

間を自己否定せしめて之を潜在的に含むといふことにはならぬ。何となれば消滅せしめるとは單に他から之を直接に否定することだからである。自己否定的に之を潜在せしめるとは同時に肯定をも潜在的に意味しなければならぬから、時間自身にそれを否定する空間の要求する如き關係を契機として含むのでなければならないのである。然らば斯かる動性の張合とは何かといへば、それはいふまでもなく、時間の過去的限定の方向への動性と、未來からの實踐的限定の方向に於ける動性とが、現在に於て張合ふ關係に外ならない。此處に屢々いはれる如く現在の同時性換言すれば時間の空間性が存する。而して時間はこの空間的なる動性の對立を交互否定の底から絶對否定の統一に轉ずることに成立するのである。前に述べた瞬間の突如なる轉換媒介が時間の要素たるはこれに由る。個の行爲的存在は之を實現するものに外ならない。空間の直接的連續に於て種が種と相違しながら相繋がる關係が有理數の系列に比せられるに對し、その切斷としての無理數が、對立する系列の發展的動性を絶對否定の統一に轉ずる行爲として轉換媒介の飛躍そのものを意味するのが、時間の現在の統一に相當するのである。而して其結果、現在の內容は單に過去の延長保存でもなく又單に未來の突發創造でもなくして、兩者の交互否定の絶對否定に轉せられた媒介となる。それは同時に過去の延長でもあり未來の創造でもある意味を有するのである。これが右に述べた個の時間的性格である。存在は常に時間の現在に於ける個の存在でなければならぬのも是に由る。斯樣に考へると種の

空間性が時間性を自己否定的に潜在せしめるといふのは、現在の有する空間的構造を以て時間の動性を交互否定の緊張に保ち、過去と未來とを現在に張合はせて時間の動性を極微に抑へることでなければならぬ。それであるから、種的空間の自己否定性といふのは、空間の含む時間的契機としての過去未來の交互否定に歸する。種の力學的空間は其隨處が時間の現在に相當する交互否定の動的均衡たるのである。卽ち空間の極微的部分は何れも時間の可能的現在たる意味を有する。併しそれは飽くまで可能的であつて決して現實に時間の現在たるのでないことも勿論である。何となれば時間の現在はたゞ過去と未來とが張合ふ緊張を意味するのではなくして、過去が未來に繫がる媒介點でもあり、啻に對立の緊張たるのみならずそれの統一として對立するものを絕對否定的に媒介するものであらねばならぬからである。恰も無理數が有理數系列の切斷として連續の要素となり對立する系列を否定的に統一するに等しい。斯くして時間は現在の瞬間に突如として成立する。それを行爲に於て成立せしめるのが個の存在である。時間が存在なくして成立せず、空間がなほ非有と形容せられるに對し時間が存在性そのものと考へられ、存在と共に成立すると思惟せられる所以である。ところで此樣に時間が空間を否定しながら之を媒介として成立するとすれば、恰も前に空間の內部に時間が現在の構造を以て入込んだ如くに、今度は時間の內部に空間が入込むのでなければならない。それでは空間は時間の如何なる契機に相當するものとして入込むことが出來るかといへば、そ

れは或意味に於て時間に於ける時間の否定者といふべき過去に相當するものとして入込む外無い。空間は今見た如く時間の動性を極微に抑へて否定するものであつた。然るに時間の樣態としての過去は、動性を失ひ不變なるものとして固定せられる傾向を有することを特色とする。時間は現在の絕對否定的媒介に由り轉換する動性に本質をもつ。瞬間の行爲的純動なくして時間は無い。然るに絕對否定の純動は自己否定を媒介として豫想する。自己否定なき單なる自己同一は時間の否定である。ところで過去は未來と對することに由つて現在の自己否定的對立性を成立せしめる。若し未來の之を否定する自發的創造性が無かつたならば過去は固定せられ、從つて現在も動く瞬間ではなくなる。斯くして過去も過去たる意味を失ひ、單なる無時間的自同性にまで固化せられる外無い。過去が過去であるのは斯かる自同化の傾向を有しながら未來と對立し、これと現在に於て否定的に媒介せられることに由り不斷に新しくせられる動と不動との相卽たるに由る。併しその動性は未來の實踐的性格に由來するのであるから、時間の基本要素が現在と考へられ、その動的契機が未來に存すると思惟せられるのも當然である。未來の創造性、現在の動性から離れては過去は時間性を失はなければならない。其意味に於て空間は時間に於ける過去に相當するといはれる。時間が空間を否定的に含むとは過去の樣態に相當するものとして之を含むのである。端的にいへば過去は空間的であり未來は勝義に於て時間的である。從つて現在が具體的には世界的であることも同時に推定せら

れるであらう。それであるから種の空間性が時間性を抑へて其動性を極微に保つといふのは、簡單にいへば過去が未來を抑へて動を固化することに外ならない。斯くして現在の絶對否定がはたらく餘地無く時間性が消滅するのである。併し過去といふ以上は飽くまで時間に屬するものであり、種の空間性は時間を自己否定的に潜在せしめる力的對抗であるから、未來が無いのではなくしてそれが過去に抑へられるのでなければならぬ。時間が個に於て實現せられるのは未來に向つてはたらくことである。從つて種の自己否定的構造は未來が契機としてありながらそれが過去の過去性の媒介たるより以上の意味を賦與せられず、その自由なる發動が抑止せられることに外ならない。斯くして空間が時間の内に入込み時間を停滯せしめて之を否定する。此事はそれだけでは極めて簡單であり形式的であつて他奇無く見えるけれども、併し私はこれが社會の歴史的構造を理解するに最も重要なる意味を有することを信ぜざるを得ない。其重要性に鑑みこゝで私の考へる所を注意して置きたいと思ふ。

空間の過去性が時間を壟斷して時間其物の未來性を抑へ其動性を否定するといふことは、現在の瞬間に於ける絶對否定の統一の代りに過去の自同的固定を置換へることに外ならない。これは過去が自己を同一のまゝに維持して未來の否定的媒介なしに飽くまで自己を延長しようとすることである。一度占有した内容を何時迄も固定して他の交代を許すまいとすることである。單に空間と時間

とを形式的に對應せしめて其等を結合するのでなしに、時間の内に基體的不變者として空間の入込むこと、それが過去の未來に對する抑壓なること、を考へると、過去の自同的延長なる保守的固化が時間性の否定であり、而して不變的固定は空間の本質に屬するから、自同的延長は空間そのものの占有よりもなほ確實なるものは他に求められない故に、空間の占有を過去的に不變永續的ならしめることが、時間性否定の典型と思惟せられる所以が明かとなるであらう。これは種族の土地占據が社會の原始共同體の分裂の初であり、其占有の永續に對する要求が歴史の發展を阻礙し時間の動性を損ふものなることに對應する。土地所有が所有の典型であるが、その論理的意味は右の如き種の自己否定に於ける過去の未來抑壓であり、その自同的固定の延長を空間そのものの不動性の實現たる土地の占有に媒介せしむるものなることに存する所以を見得るであらう。種の自己否定性は種的空間の時間的構造に由來し、而して空間の永續的占有に於て却て空間がその過去性を以て時間性を否定せんとする矛盾に於て完成するといふのが右の論理の要旨である。相對性理論はその空間時間の不可分的聯合の思想に於て、兩者の形式的對應として運動を考へたニウトン力學の抽象性を指摘し、運動の觀測に媒介となる光が實質的に空間と時間とを媒介することを原理化した。ニウトン力學の考へる運動は光の速度が無限大となつた極限の場合に相當し、其場合に於ては形式的に空間と時間とが區分せられながら要素の對應をなさしめられる。然るに光の速度が有限なる場合に於て

は觀測の媒介に入込む光の速度に對應する限界內に於て空間と時間とが不可分の統一をなし、其限界を超える要素的對應を不可能ならしめる。卽ち光を媒介として空間時間が相互に入込み合ひ、分離することの出來ぬ統一を成すといふのが此理論の骨子と思はれる。實證的なる事實としての觀測に媒介となる光のはたらきを實質的に取上げ、之を抽象的觀念的なるニウトン力學の構成に置換へた所に其劃期的意義があるといふべきであらう。私はこれに導かれて種的空間と個的時間との相互否定的なる媒介が兩者の互に入込み合ひ、以て相互に含み含まれる統一をなすことを注意し、特に今述べた如く、空間が土地の形に於て、而もそれが單に物質としてでなく、一度占據せられ永續的に占有せられるものとして、時間性を含みながら、其永續的占有に由つて却て時間性を否定する自己否定的基體としてはたらくことを考へたいと思ふのである。是に由つて種の自己否定的分裂と個の絕對否定的統一との意味が前より一歩具體的に理解せられるかと想像する。相對性原理の光に對應する空間時間の實質的媒介は社會的歷史的には土地占有といふことであると考へられないであらうか。

若し此樣に考へることが幸にして大過なしとするならば、類の全體的統一も個に對するそれの關係に於て、今までよりも一歩具體的に規定せられることが出來るかと思ふ。併しそれは節を改めて別に考へることにしたい。（未完）